

小折古墳群の研究

—江南市天王山遺跡の家形埴輪—

早野浩二

小折古墳群中の江南市天王山遺跡（「富士塚の西」）においては、尾張型円筒埴輪と形象埴輪が採集されている。その形象埴輪を鰐状装飾（鰐飾り）を表現する家形埴輪として、類例との比較から推定復元案、製作工程案を示し、時期を東山11号窯式期から東山10号窯式期と推定した。村絵図、地籍図や空中写真からは、消滅した前方後円墳の存在が想定され、天王山遺跡（古墳）から、江南市曾本二子山古墳、大口町いわき塚古墳に続く有力古墳の系列を把握した。

1. はじめに

愛知県埋蔵文化財センターは令和元年度に白木遺跡（丹羽郡大口町豊田一丁目）、令和2・3年度に南山町遺跡（江南市南山町西・中・東）の発掘調査を実施した。南山町遺跡に隣接する天王山遺跡（南山町中）においては過去に埴輪が採集され、現在、江南市教育委員会が保管している（江南市1983、赤塚2001）。南山町遺跡・白木遺跡の発掘調査に関連して天王山遺跡の遺物を調査したところ、特に形象埴輪について重要な知見があったので、以下にその内容を報告する。

2. 天王山遺跡

天王山遺跡は五条川右岸の自然堤防上に立地する。周辺には富士塚古墳、曾本二子山古墳（以上、江南市）、いわき塚古墳、神福神社古墳（以上、大口町）等の古墳が分布し、小折古墳群とも総称されている。遺跡は小折字天王山（「富士塚の西」）において、昭和32年の道路改修時に山崎真臣氏が埴輪等の遺物を採取したことにより、認定、登録された。他に須恵器、瓦塔（一宮市博物館保管）も出土したとされるが、瓦塔は注記からすると、他の遺跡から出土した可能性も考慮する必要がある。埴輪は円筒埴輪と形象埴輪がある（図1・写真1）。いずれも土師質で、硬質に焼成される。

円筒埴輪（1～11）は規格、段数が判明す

る個体はないが、いずれも2突帯3段構成と思われる通有の尾張型円筒埴輪である。突帯は低い断面「M」字形で、外面に回転ヨコハケ後、底部付近に回転ケズリを施す。10は外面に紐ずれ痕と思われる圧痕が認められる（1～5は『市史』本文編に掲載された実測図、6～11がそれに追加して新たに作成した実測図である）。

3. 家形埴輪

種類・部位

家形埴輪（12）は、すでに実測図（拓本・断面）と写真も掲載され、「盾形埴輪」ともされている。今回、改めて鰐状装飾（鰐飾り）を表現する家形埴輪の上屋根（大棟）部分として図示した。大棟に多数の鰐状装飾を表現する家形埴輪は、尾張型円筒埴輪を伴う味美二子山古墳（全長約100mの前方後円墳）、小幡茶臼山古墳（全長約81mの前方後円墳）、外山3号墳（径約25mの造出し付円墳）に確認されている。味美古墳群に埴輪を供給したことが判明している下原古窯の鰐状装飾も同様の家形埴輪の一部と考えられる（図2）。

特に上屋根の狭長な三角形構造は味美二子山古墳（1）、大棟を逆V字形にして頂部に粘土を充填する成形は下原古窯の家形埴輪（5）によく類似する。鰐飾り、鰐状装飾がある家形埴輪は比較対象を含めて多くが入母屋造であることから、天王山遺跡の家形埴輪も入母屋造であった可能性が高い。

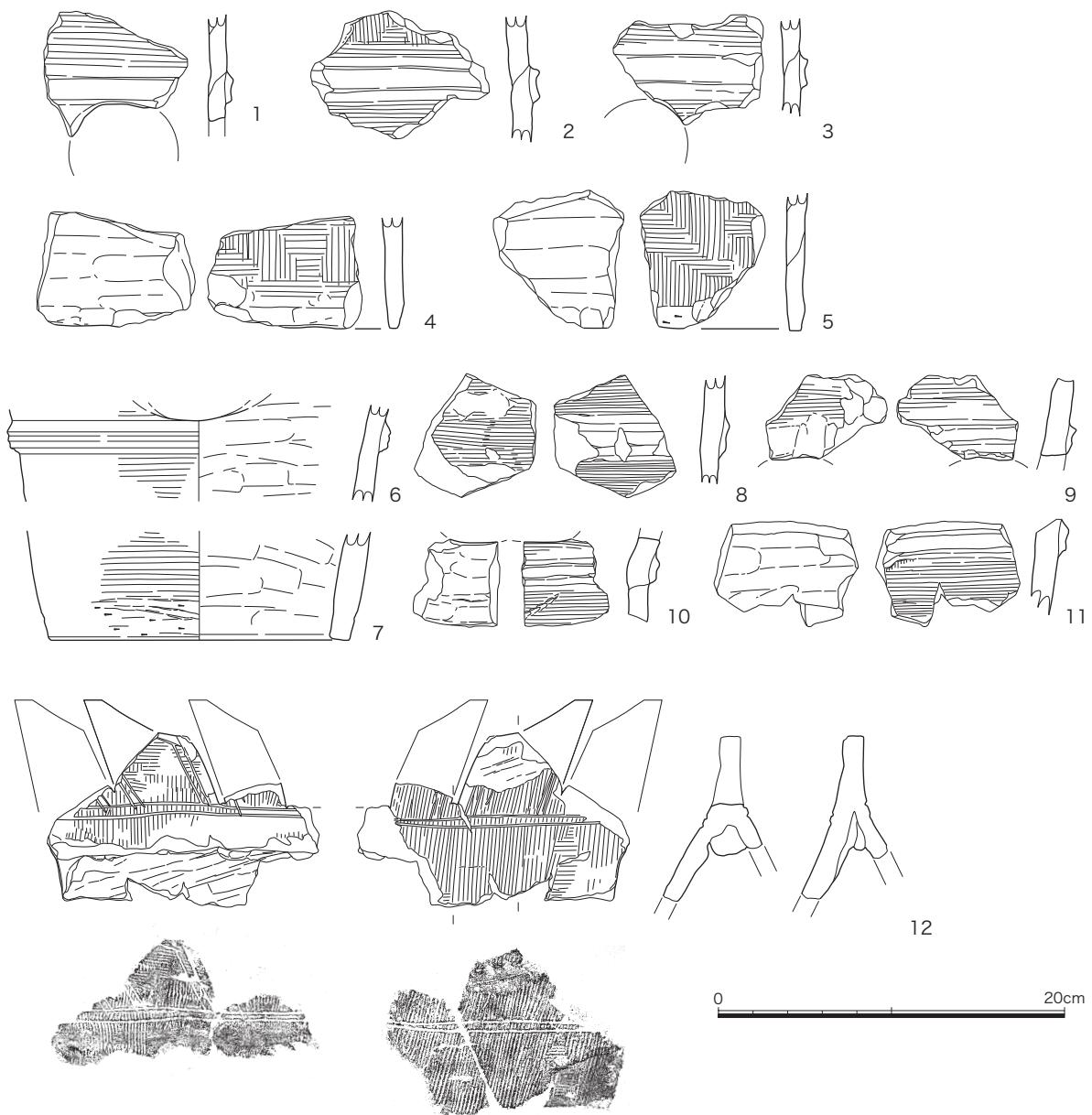


図1 天王山遺跡出土埴輪

鱗状装飾・棟覆

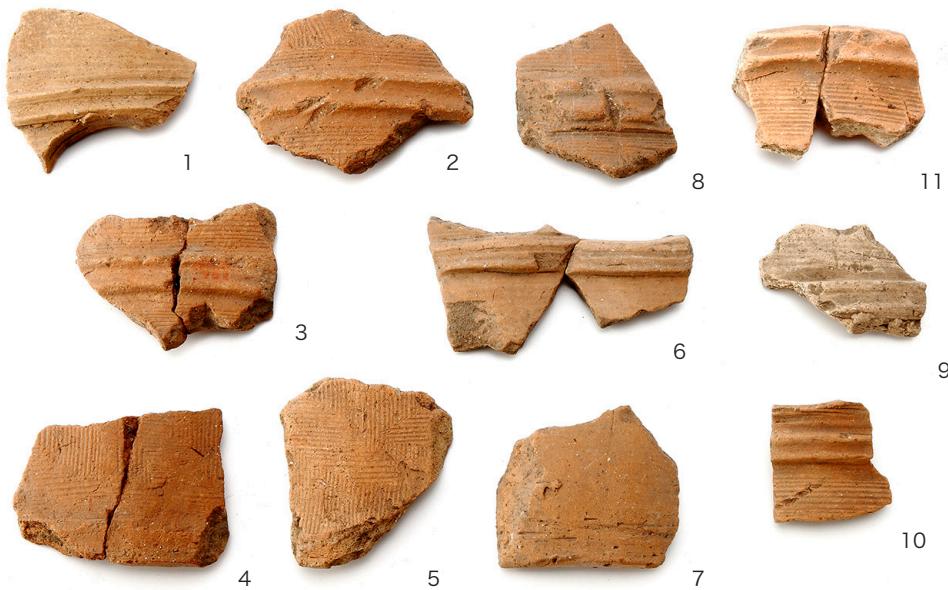
大棟上の鱗状装飾は同一方向に傾斜する3枚分が確認され、切削により設けられた鱗状装飾相互の間隔はかなり狭小であるが、折損部分の一端には水平方向に切削した端面が確認される。この部分が大棟の中央付近に相当し、左右対称に連続した鱗状装飾を表現したことが想定される。この配置表現は中央付近の対向する鱗状装飾間の間隔がやや広く設けられる点を含めて、味美二子山古墳1類家形埴輪(1)に類似する。(かなり誇張された)特異な短冊状の表現とは異なるものの、鱗状装飾の形状は(左右

対称と想定される)同2類家形埴輪の表現(2～4)、小幡長塚古墳の表現(8)に類似する。

鱗状装飾は二本一対の刻線で縁取りするが、その下端に接して同様の刻線を水平方向に施すことによって押縁の水平材をも表現する。棟覆に網代表現はなく、鱗状装飾部分を含めて全面にヨコハケ後、タテハケを施す。

推定復元

左右対称とした場合の妻側の一端には平坦面が認められる。この面は妻転び成形に伴う成形、乾燥単位で剥離した面と考えられる。試みに鱗状装飾の配置表現がよく類似する味美二子



3



12A



12B



12C



12D

1~11. 円筒埴輪

12. 家形埴輪 12A. A面 12B. B面 12C. 妻転び成形の乾燥単位と頂部内面の補強 12D. 鱗状装飾(鱗飾り)の切削

写真1 いわき塚古墳の遺物

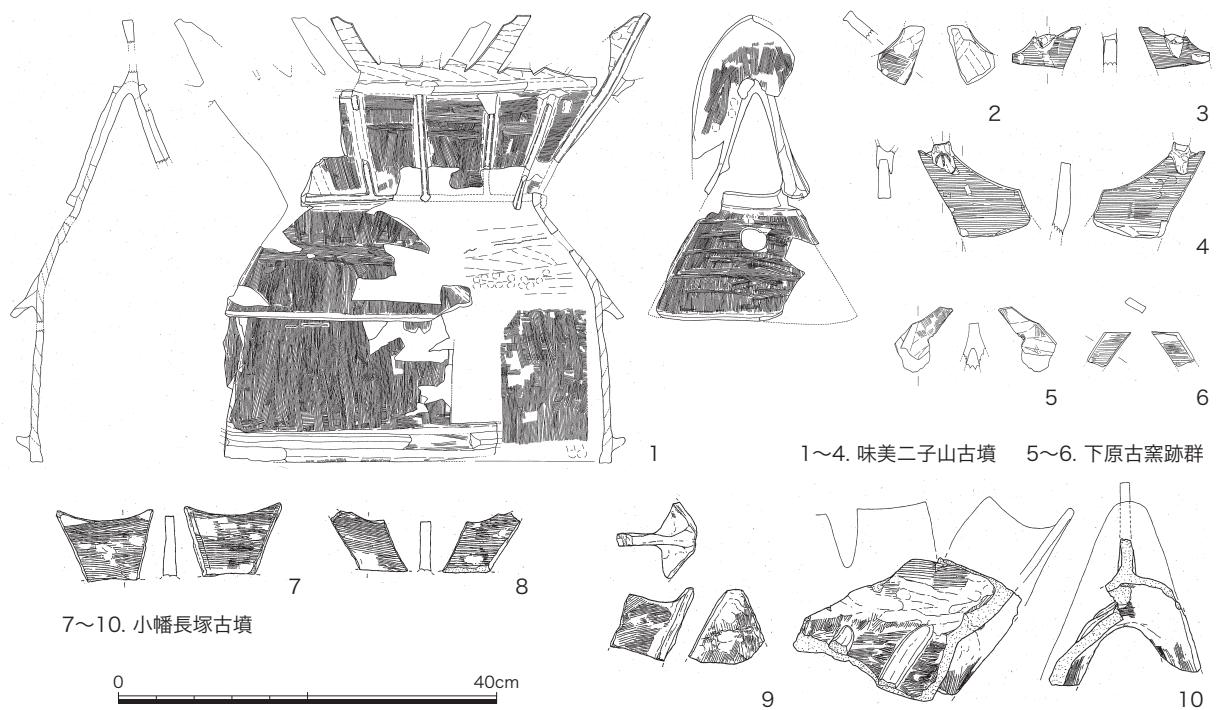


図2 鰐状装飾（鰐飾り）を表現する家形埴輪の諸例

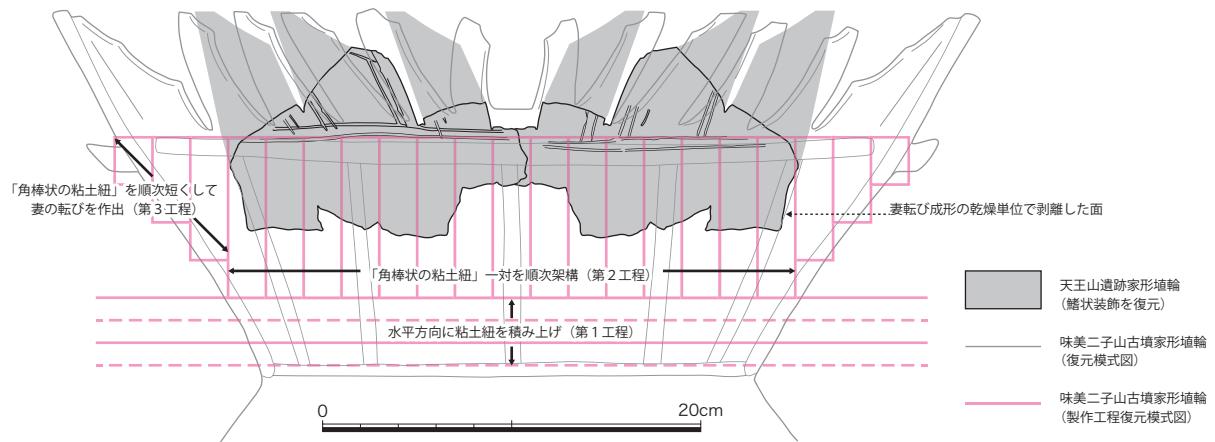


図3 天王山遺跡と味美二子山古墳の家形埴輪の比較（味美二子山古墳の家形埴輪の製作工程）

山古墳1類家形埴輪の想定復元と天王山遺跡の家形埴輪を同一縮尺で重ねると、味美二子山古墳の押縁の表現が刻線ではなく突帶である点は異なるが、水平材の位置、大棟と妻転びとの成形単位の位置もよく一致することが分かる（図3）。翻って、天王山遺跡の家形埴輪は味美二子山古墳の家形埴輪と類似した構造、表現、大きさが想定される。

製作工程

類似を指摘した味美二子山古墳の1類家形埴輪については、詳細な観察により製作工程が示

されている。破風板、鰐状装飾等の部位を付加するまでの上屋根の製作工程については、妻側を閉塞しない平側のみの成形で、水平方向に粘土紐を積み上げ、上屋根の下半までが完成（第1工程）、「角棒状の粘土紐」一对を順次架構し、水平方向に引き延しながら接合（を強固にする）、これを繰り返して妻転びを除く大棟までが完成（第2工程）、「角棒状の粘土紐」を順次短くして妻の転びを作出（第3工程）、となる（図3）。

天王山遺跡の家形埴輪は「角棒状の粘土紐」

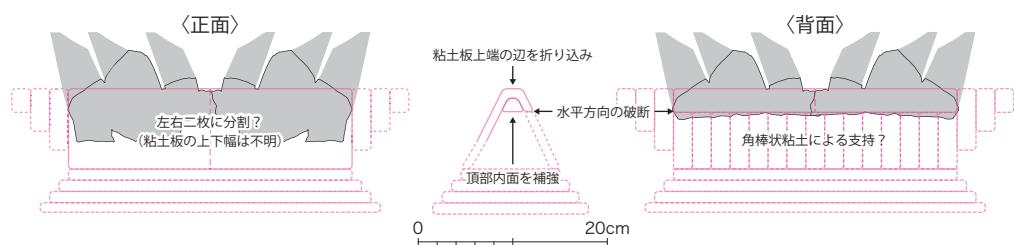


図4 天王山遺跡家形埴輪製作復元(案)

の顕著な接合痕（密着させるだけに近い接合）が認められないことから、少なくとも一方の（妻転びを除く）大棟は一枚分、または左右一対の板状の粘土を使用しているようである。もう一方はほぼ水平方向に破断していることからすると、一方の屋根を支持するようにして、もう一方に「角棒状の粘土紐」を用いて成形した可能性がある（図4）。

時期

味美二子山古墳の家形埴輪が鰐状装飾をより誇張し、鰐飾の特徴でもある刻線の表現を省略することからすると、それに先行する可能性もあるが、個体差と考える余地もある。味美二子

山古墳の築造時期を東山10号窯式期とすれば、味美二子山古墳の家形埴輪が出土との類似、あるいはそれにやや先行する可能性から、天王山遺跡の埴輪は東山11号窯式期から東山10号窯式期として大過ない。この理解は尾張型円筒埴輪の諸要素とも矛盾しない。

山崎真臣氏が「木賀、小折富士塚周辺」(現在の長塚遺跡、天王山遺跡に該当)で採集した資料中には、東山11号窯式期から東山10号窯式期の須恵器高杯がある(図5)。天王山遺跡の埴輪に伴う可能性もある。

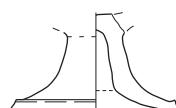


図5 「木賀、小折富士塚周辺」採集須恵器高杯

性格

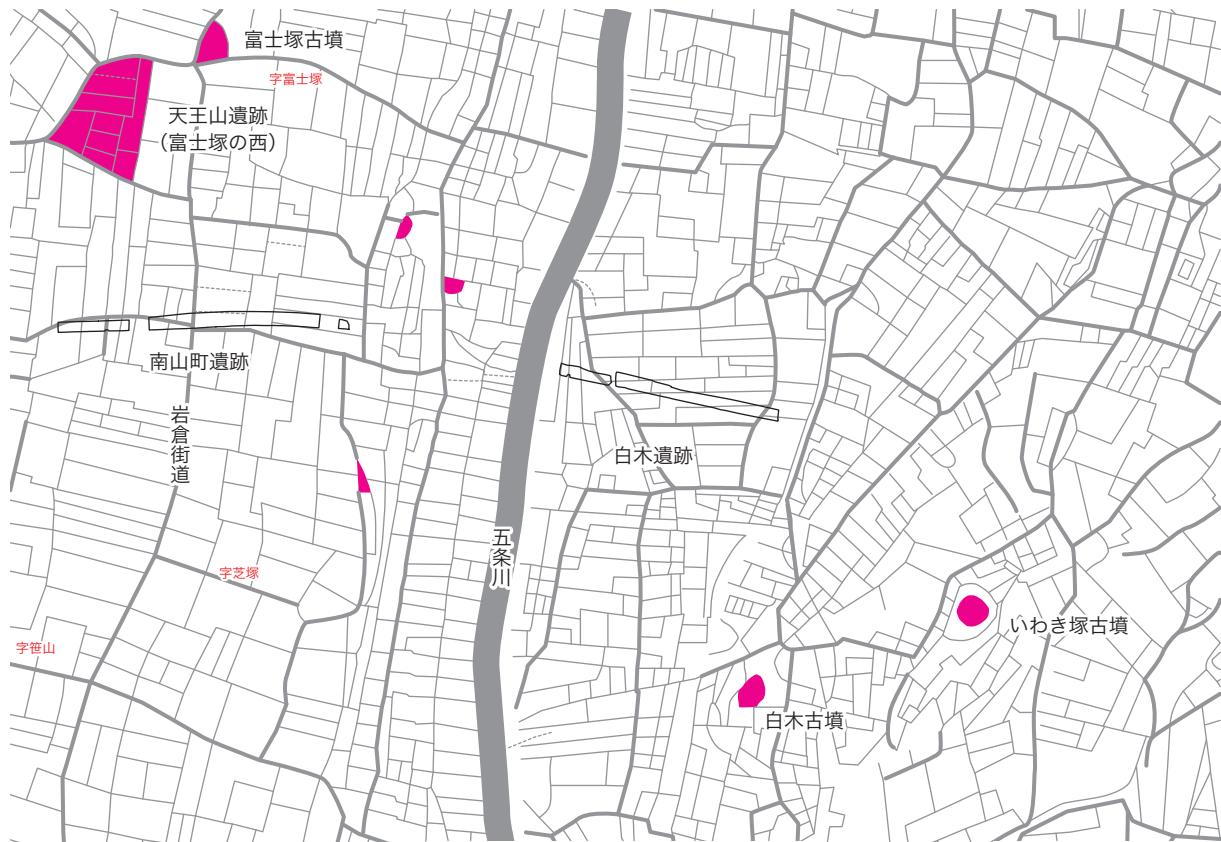
鰐飾りがある家形埴輪の大きさは堅魚木がある建物をも凌ぐ事例から、鰐飾りは堅魚木よりも格式の高い棟飾りであったともされる（清水1988、三輪・宮本1995）。尾張型埴輪に伴う鰐状装飾がある家形埴輪の事例は、外山3号墳が造出し付円墳である以外、味美二子山古墳、小幡長塚古墳で、いずれも大型の前方後円墳である。天王山遺跡についても相応の古墳の存在が想定される。

4. 天王山遺跡の古墳



図6 年不詳丹羽郡小折村絵図（徳川林政史研究所）

年不詳の丹羽郡小折村絵図（徳川林政史研究所）には、岩倉街道（柳街道、現県道小口岩倉線）を挟んで「富士塚」の南西に「村上山」が描かれ、般若寺北に「天王社」がある（図6）。「天



6



昭和21年空中写真(岩倉街道県道制定後・県道小口岩倉線制定前)

図7 明治17年地籍図、昭和21年空中写真と天王山遺跡周辺



天王山遺跡（昭和 21 年空中写真）



天王山遺跡 二子山古墳 ×1/2



天王山遺跡 小幡長塚古墳 ×2/3

図 8 天王山遺跡に想定される古墳（盾形の痕跡）と味美二子山古墳、小幡長塚古墳との比較（1:2,000）

「王社」は生駒氏五代が勧請したと伝わり、字名である「天王山」の由来となった（絵図には他に「宝頂山」や幾つかの「山」、「念佛塚」、「経塚」が記載されている富士塚古墳周辺に点在するこれらの「山」、「塚」も小折古墳群を構成する古墳であった可能性がある）。「富士塚の西」の天王山遺跡で採集された埴輪は、ひときわ大きい絵図上の「村上山」に伴っていたことが想定される。

明治 17 年の地籍図には「字富士塚」の「塚」の南西に盾形の区画が認められ、昭和 21 年に米軍が撮影した空中写真には直線的な岩倉街道に貫かれた盾形の周濠と思われる痕跡を判読することも可能である（図 7）。国道岩倉街道は明治 18 年に県道に定められたことに伴って明治 19 年に改修された際（その翌年に竣工）、（「村上山」の）墳丘上を横切るように付け替えられ、その改修時に墳丘が大きく損壊した可能性がある。さらに昭和 34 年、現在の県道 17 号小口岩倉線に制定される前の大規模な改修時（昭和 32 年）に古墳は完全に滅失し、その際に埴輪が採集されたのであろう。

地籍図や米軍による空中写真に認められる盾形の周濠の痕跡は長さ約 80m で、平面形と規模は味美二子山古墳の約二分の一、小幡長塚古墳の約三分の二に相当することからすると、「富士塚の西」で採集され埴輪が伴っていた古墳は 50m 程度の前方後円墳であったとも推測される（図 8）。絵図上の「村上山」が「富士塚」よりも大きく描かれていることからも了とされる。

5. おわりに

天王山遺跡の埴輪に鰐状装飾を表現する家形埴輪の存在を確認し、その評価を踏まえて相応の古墳の存在を想定した。周辺には富士塚古墳（前方後円墳？）、金銅装馬具を副葬する曾本二子山古墳（全長約 60m の前方後円墳）、刃間に花文を象嵌した大刀と三角穂式鉄鋸（図 9）を副葬するいわき塚古墳（径約 21m の円墳）、神福神社古墳（前方後円墳？）等の有力な古墳が分布し、小折古墳群を構成する。

天王山遺跡に東山 11 号窯式期から東山 10 号窯式期（TK47 型式期から MT15 型式期）の 50m 程度の前方後円墳の存在を想定することにより、東山 61 号窯式期（TK10 型式期）の曾本二子山古墳、蝮ヶ池窯期（TK43 型式期）のいわき塚古墳に続く（築造時期、墳形が不明な富士塚古墳、神福神社古墳を含めた）有力古墳の系列が把握されることになる。曾本二子山古墳の段階に埴輪の使用が停止され、いわき塚古墳の段階に有力な古墳が大型円墳に転換する過程も改めて確認される。天王山遺跡の埴輪は小折古墳群、古墳時代後期の尾張に対する評価に大きく資するであろう。

天王山遺跡の埴輪の資料調査に際しては、江南市歴史民俗資料館佐々有三館長に格別な配慮を賜った。その他、赤塚次郎、浅田博造、池口太智、服部哲也の各氏からもご教示を頂いた。末尾ながら記して謝意を表する。

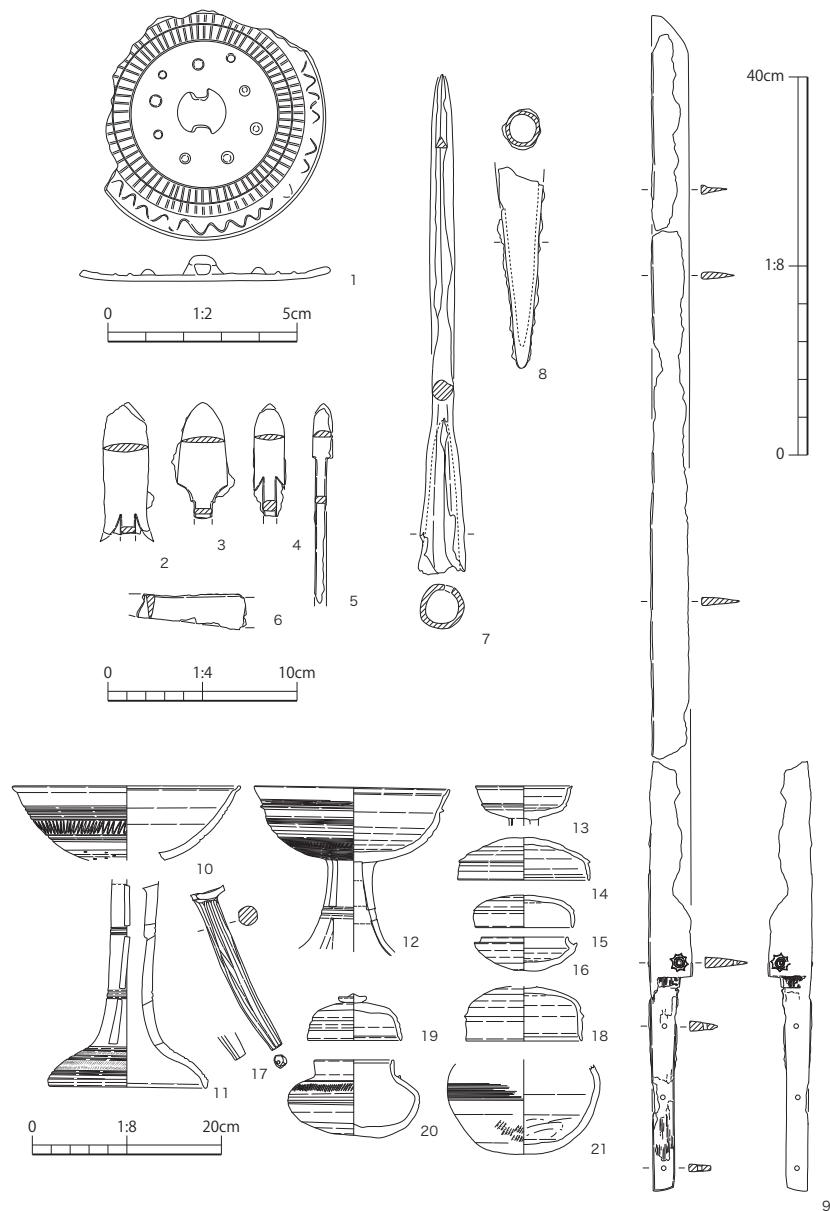


図9 いわき塚古墳の遺物（大口町歴史民俗資料館所蔵）

参考文献

- 愛知県 2005『愛知県史』資料編3 考古3 古墳
 赤塚次郎 2001「原始」『江南市史』本文編 江南市
 春日井市教育委員会 2004『味美二子山古墳』春日井市遺跡発掘調査報告第10集
 春日井市教育委員会 2006『下原古窯跡群』春日井市遺跡発掘調査報告第12集
 江南市 1983『江南市史』資料四 文化編
 江南市 1994『江南市史』近世村絵図編
 清水真一 1988「もう一つの屋根飾り—家形埴輪から復元される大王宮殿—」『考古学と技術』同志社大学考古学シリーズIV 同志社大学考古学シリーズ刊行会
 名古屋市教育委員会 2011『埋蔵文化財調査報告書63 小幡長塚古墳（第3次・第4次）』名古屋市文化財調査報告80
 三輪嘉六・宮本長二郎 1995『家形はにわ』日本の美術 第348号 至文堂